

特254

234

光榮
記念
蘭
之
拜
心
記



始



特254
234



(寫眞南竹野丸) 花切の賜恩下陸后太皇



(郎四島福蘭拜) 子葉御と花御ノ賜恩

群蘭畫屋

昭和二年
福島県
小島町

(上) 杉山三郊翁筆



恩賜カーネーション
第二世(昭和十四年十月二十八日撮影)

(下) 鐵翁祖門筆
墨蘭(福島晚晴翁寄贈)



昭和十一年十月二十九日

光榮蘭を拜む記

光榮蘭を拜む記
昭和十一年十月二十九日
福島四郎謹稿

光榮蘭を拜む記

著者寄贈本

福島四郎謹稿



十月二十九日（土曜）の午後、社の電話係が、「唯今大宮御所から社長への御電話で、明後日の午後一時に、大谷大夫のお部屋までお出立になるやうな御用意を、折柄會議中だったので、たゞ時御だに御座いますか」と承知いたしました」と御請けさせておいたが、さて何の御用だかかと考へると、聊か不安である。

翌三十日は教育勅語御下賜の記念日且日曜なので、家にこもつて、例の正氣の歌一枚を認め、夜に入つてから、西邑皇太后宮事務官の私宅へ電話をかけて、大夫から明日お呼び出しに預つてゐることを告げ、「御用の筋を

内々承はらせて戴けまいか」と乞うたが、「電話では申上げかねる」と答へられて、輕卒な自分を恥ぢないではゐられなかつた。しかし氏の口ぶりでは悪い御用では無ささうだと想像されたので、幾分か安心した。

三十一日は好い天氣だつた。新町で流しのタクシーに乗り、鮫ヶ橋の御通用門で大夫への取次を乞ふと、既に私の名が通ぜられてゐたので、そのまま、車で入門を許され、御玄關から奥ぶかく導かれて、床面が一段高くなつてゐる御殿の應接室へ案内された。

まもなく大谷皇太后宮大夫が出られて、皇太后陛下には、明治三十三年五月十日東宮妃として御入内の當日に創刊した婦女新聞が、この度二千號に達したことを御満足に思召され、「多年苦勞であつたであらう」との御言葉と共に、「内々にて大夫より戴かせよ」との仰せであるとして、洋紙に覆はれた御切花三束と、白布に包まれた御菓子三箱を賜はつた。

白布に包まれた御菓子三箱を賜はつた。

私はあまりにも意外な大光榮に、感激するよりも前に、之をこのまゝお請け申してよいのだらうかと迷つた。しかしいかに分に過ぎた光榮であつても、この場に臨んで御辭退など、出来もしなければすべきでもない、漸く思ひ定めて謹んで拜受したが、まだ夢心地である。

大谷大夫は、この光榮が表立つた性質のものでなく、御内々の有難い思召に出でたものであること、御花は新宿御苑の御産なること、御花御菓子共に、恐れ多くも御自身で御指圖あそばされたものである趣など、坐談的に漏らされた。私はたゞ恐懼感激して涙を拭ふのみであつた。

賤の名を知らしめすだに畏きを

ものたまはりし榮をいかにせむ

有難しかたじけなしといふよりも

いのちのちぢむ思ひなりけり

うれしさに心はふるひかしこさに

身はをののきぬ大宮にてわれ

人違ひならずやとわれたためらひぬ

ふでとる者に例たとなければ

うちくのおぼしめしぞとさとされて

忝かたじけなさにいよよ泣かるゝ

この上に何をのぞまむ人の世の

富もくらゐも今はものならず

身は早く老いぬるものをいかにして

答へまつらむけふのみむねに

夢心地で退下すると、仕人が御花と御菓子を自動車まで運び入れて、傷まないやうにと、いとも親切に世話せられた。御玄關の外までも斯く行届

いたお世話は、他の役所はいふまでもなく、個人の家でも珍しいことで、感激ひとしほである。

参入の折は御通用門からであつたが、歸りには自動車のまゝ、權田原の表御門から退出せしめられた。御門の兩側に立つてゐる警手が、舉手の禮を以て送つてくれるのも晴々しい。

はじめての終りなるべき許されて

表御門みかどをしづの過ぐるは

社に歸つて、早速有合せの粗末な花瓶を取り出して御花をさし、御菓子を前に飾り、全社員を集めて光榮を傳達した。

御花の一束は黄白の菊、一束はダリヤ、カーネーションなど、目もさめるやうな美しさで、更に一束は數種の蘭の花を、アスパラカスの青に配したいかにも氣品の高いものである。

小枝ならば襟にさしても舞ふべきを

かひなにあまる三つの花束

しづが家もたふとくなりぬ九重の

御苑のはなを今日はかざりて

御菓子の一箱には、二寸に三寸ほどの青い羊羹、中央に赤い楓の一片を現はした優雅な御品が一ぱい満たされ、「大和錦」と書かれた小紙片が載せてある。

たまはりしやまと錦を着かざりて

賤の身もけふ榮にかゞやく

他の一箱には、菊の花に象どつた紅白の打菓子が、一つく薄紙に包まれ、名の札には「千歳の園」と記してある。

君が代のちとせの園におそるく

あしふみ入れて菊の香をかぐ

今一種、ボール函に入つたのは、「戦捷」と名づけられた御祝菓子で、国旗と軍旗とを交叉した模様が美しい。これは皇軍連戦連勝の折柄とて、附けて賜はつたものと拜察する。

かちいくさほきます君が御宴に

めされて侍ることちするかな

大宮御所へ参殿してゐる不在中、明治神宮宮司の有馬大將方から電話があり、揮毫が出来てゐるから社務所まで取りに來いとこの事である。この揮毫といふのは、郷里の兵庫縣小野高等女學校及び小野小學校の爲に、依頼してゐたものであるが、この光榮の日に出来あがつたのは、重ねくの喜びである。

あなうれし願ひしこともかなひけり

願はぬ榮をたまはりし今日

やがてそれを受取りかたぐ、明治神宮に参拜し、今日の光榮を奉告して御禮を申上ぐる折、

あやまりてかざし、榮の花なるを

この大神のとがめざらなむ

有馬宮司が明治節を前にひかへてさぞ多忙であらうのに、意外に早く揮毫せられたのは、紹介者が齋藤春子刀自（齋藤實子爵寡夫人）であつたからと察せられるので、直に刀自への禮狀を認めたまはしに腰折を書きつけたが、小野高女校の同窓會を柳櫻會と稱し、揮毫文字には柳櫻頌春とあるので、その意味を含めて、

やなぎ櫻にほふ木かげに君が名の

春をたゝへてとはにわすれじ

御花を一日にても長く保たせるやうにと、婦人公論花の店の永島四郎君に來てもらつた。君は夕方來社して、花瓶の御花を全部取り出して、一本々々入念に處置し、三つの桶に移したが、君が花を扱ふ様子は、さながら母が子を愛してゐるやうである。やがて君は、「今晚ひと晩斯うして花を休ませてやり、明朝又來て瓶に飾りますから」と、言ひ残して歸つた。私はその「花を休ませてやる」といふ一語を、意味深く聞いた。

子を思ふやさしき母のこゝろもて

はなをいたはる人のうれしさ

翌十一月一日、永島君は約束通り早朝に來て、大小三つの花瓶に御花を飾つてくれた。昨日よりも更にうつくしく、更に香ばしく、更に氣高く拜せられる。

私は早速その傍に立つて、社の寫眞部の服部君に撮影してもらつたが、

なほ御花の色彩を永く留めたいとおもひ、丸野竹南畫伯に電話して寫生を頼んだ。

竹南君はすぐ來社して、私の光榮を祝するために奉仕すると言つて、二日間無報酬で畫筆を持ちつゞけてくれた。出來あがつた畫は絢爛華麗、いかにも御花の眞を現はして、寫生の名に背かない。

色かたちさながらの畫とならべおきて

はなのいのちもうつれとぞ祈る

私は更に希望して、御菓子をも描いて貰つたが、「千歳の園」の薄紙づゝみと、「大和錦」の羊羹の色を出す爲には、かなりの苦心を要したらしい。おかげでまご子の末まで、この光榮の眞を想像させることが出来るのはうれしい。

兩親と長兄とが生きてゐたら、どんなに喜んでくれることだらうと思ふ

と、平素は忘れてゐる淺草萬隆寺の墓へ、參らないでは氣がすまない。則ち妻を伴うて行き、墓前に額づいて報告した。

つちの底ふかく入りても語らばや

家のほまれの今日のよろこび

その歸途、かず數い婦女新聞の恩人の代表といふ意味で、穂積歌子刀自の谷中のお墓に詣でた。

たすけつるかひありけりと亡き人も

かしこみながらほ、笑ますらむ

なき人のみこゑ聞ゆとおもひしは

こずゑに鳴きし小鳥なりけり

日數がたつにつれて、いよいよ光榮の大きいことが感ぜられるので、いねて思ひさめて又おもひつくづく

思ひ知りぬる我が大き榮

この大きな光榮を思ふ時、私はどうして此の有難い 思召に答へ奉つたらよいかに思ひ迷つた末 皇太后陛下が年ごろ御心を勞せさせ給ふ癩患者絶滅運動に思ひ及び、私の今後の餘生をそれにさゝげて、婦女新聞もその爲に働くことにするのが、一番よい道でないかと思ひつくと同時に、その具體策について考へた。そして相棒として、最近閑地に就きながら社會奉仕の念つよく、特に 皇太后陛下の御徳を欽仰せる元船長、長田堯春君の協力を頼むことに案を定め、同君に來社を乞うて相談した。同君は、その生涯を献げなければならぬやうな大事業に、私が何の下話もせず強制的に回答を促すので、「まるで爆弾的の相談ですな」と笑つたが、實際あの時は、私も年に似合はず興奮してゐた。(その長田君が、一年後の今日もう此世の人でないことは、感慨無量である。)

長田君に相談した翌日、私は更に婦女新聞組合員たる吉岡彌生、岸澄子、一宮操子、田中芳子の四婦人に來社を乞うて、賜はり物を見てもらつた上今後癩絶滅の運動に全力を傾けて、この光榮に答へ奉りたい決心であることを打ち明けると、田中女史先づ口を開いて、婦女新聞はやはり婦女新聞として、過去四十年近く歩み來つた道を進み、全婦人界の向上と女子教育の振興に力を用ひるのが 思召にも副ふのではないでせうか、といふ趣旨を強調せられ、吉岡女史また、癩運動にはすでにそれらの機關や團體が作られて居ること、婦女新聞が外部からそれ等の運動を援助することは結構であるが、全力をそれに傾けることは賛成しがたいといはれ、岸、一宮兩夫人も、婦女新聞が目標を變更することは、決して光榮に答へ奉る道ではあるまいと、口を揃へて反對せられた。考へて見ると成程さうである。私は聊か熱しすぎてゐたと氣がついた。

御ひかりに目のくるめきてあやふくも

わが行く道をそれんとぞせし

年の手前も恥しい軽卒だつたと反省すると同時に、春以來休んでゐる社説の執筆を、若返つた氣持になつて再び自らしようと決心した。

昭和十年、婦女新聞創刊三十五周年の記念として、私は多くの方々の御援助の下に「婦人界三十五年」と題する論文集を發行したが、その際大宮御所よりあまた御買上の恩命あり、且定價以上の料金を、御水引結びで賜はつたので、感激のあまり「身に過ぐるほまれむくいを受けたればこよひ死ぬともうらみなしわれ」と詠んだが、今度の大光榮にも、これ以上にいふべき言葉がないので苦しんだ。

百千たびくり返してもうたはなむ

こよひ死ぬともうらみなしわれ

身に過ぐるほまれに恥ぢて悩むよりも

こよひのうち寧ろ死にたき

十一月十三日の日曜に、全社員職工うちつれて多摩御陵に参拜し、しみじみと御禮を言上した。この世に於ては無位無官の我々が、畏き御あたりへ近よる事など思ひもよらないが、御陵に於ては全く四民平等、賤しい自分の如きものも、瞑目黙禱することによつて神靈に拜謁し、胸に思ふことを親しく言上することの出来るのが嬉しい。これは明治神宮に於ても同じ道理であるが、彼所はあまりに参詣者が多いので、神前に長く留まつてはゐられない。

多摩御陵に詣でると、私は大正時代の社會思想の悪化を想起し、あの當時こそは眞に戦争以上の國難時代であつたと、戦慄する思ひをすると同時に、御病弱の御身を以て、あの際大統を承け繼がせ給うた 先帝陛下の御

宸勞を恐察し奉つて、御いたはしさに涙を禁じえないのである。

みさゝぎの木立はやく古りしかど

わが思ひ出のあたらしきかな

たみのこゝろ荒びはてつる彼の御代を

思ひ出づるだにかしこかりけり

参拜者の中に、看護婦があるのを見て、先帝陛下が曾て赤十字社看護婦が露國へ赴くのを御満足に思召され、漢詩をお作りになつたといふ新聞記事のあつた事を思ひ出した。御製は記憶しないが、「白衣婦女」といふ四字があり、傷病兵看護の功は軍人の戦場の功にも譲らないといふ御意味であつたやうに思ふ。それで

つはものも傷手をみとるをとめらも

同じいさをとはげましたまふ

と口ずさんだ。

御陵からの歸途高尾山に登つたが、一行中には、かゝる山上の眺望に初めて接したものの少なからず、頻に感嘆の聲を放つので、光榮の餘澤が彼等にも及んだことを、喜ばないであられなかつた。私は此の高尾山が、今は多摩御陵の鎮護になつてゐることを思ひ、この山上の秋晴の眺望を、皇太后陛下の御覽に入れる日の速に來れかしと祈る。

下山の途中、記念のためにと、路傍で春蘭を購つて歸つた。

頂戴した御菓子は、二週日の後、社の特別關係者十數氏と全社員・全職工・小使・給仕及び親戚の家々にまで、一小片づゝ頒ち、家族は女中までも、座敷に集まつて拜味した。御切花も、同じ頃まで觀賞した後、菊・ダリヤ・カーネーションの三種は、腋芽を摘み取つて土に挿し、根をおろさせて、永久に光榮の種を遺すことにしたが、蘭花のみは、生かす方法のない

のが遺憾である。

そこで思ひついたのは、自分の別號を蘭の字の附く新成語に改め、今後文章に署名する都度、感謝の念を新にしたいといふことであつた。つまり蘭と自分とを終生離れないものにしようといふのである。私は近年、和歌の場合に限つて和田百邦といふ別名を用ひるが、その他は五十年來春浦といふ別號で通して來たので、今になつて改號するのは聊か残り惜しいが、今度の大光榮を記念する爲と思へば惜しむに足らぬ。

斯う思ひ立つと、一刻も早く實現したくなり、直に杉山三郊翁を訪問して、新號の撰定を乞うた。翁は私が三十餘年來尊敬し來つた老儒で又名筆である。勅撰の廣澤參議碑や、故澁澤子爵、下田歌子等の墓石文字も、翁の書である。翁は夫人湘碧女史と共に、私の光榮を自家の光榮の如く喜び早速佩文韻府を持ち出して、蘭の字の成語を片端からしらべられた。

翁はやがて莞爾として、佩蘭の二字を指し示して曰ふ、「これは離騷賦の作者楚の屈原が、讒者の爲に流竄の身となつても尙忠誠を忘れず、王者の香と呼ばれる蘭花を胸に佩びて、君側に侍する思ひをしてゐたといふ故事から出た成語であるが、この佩蘭の佩の字を拜に代へて、拜蘭と改號してはどうか。」

三郊翁は斯う言つて、更に説明をつづけた。「古書に拜蘭といふ成語はない。蘭を拜むと書くのは一寸をかしく感ずる人があるかも知れないが、他に拜石といふ故事があるから少しも差支ない。宋の有名な書家米芾（字は南宮）は非常に石が好きで、終日石を愛玩し、爲に官職を怠つて譴責せられたこともあるといふ。この米芾、ある時極めて形の面白い石を發見し、感嘆のあまり衣冠をつけて其石の前に拜禮した。それ以來拜石丈人と呼ばれたといふ事であり、我が朝に於ては菅公の詩に、恩賜の御衣今在此、捧

持毎日拜。餘香」ともあるから、恩賜の蘭を記念する意味の別號として、拜蘭は好適でないか。」

私は翁の説明の未だ終らないうちに、手を拍つて歡喜の意を表した。實際これ以上、今の私の氣持にぴつたり合ふ造語が得られようとは思はれない。私は又しても手を拍つて喜ぶのだつた。そして拜蘭書屋の額面揮毫を乞うて快諾を得たのは、重ねくの喜びであつた。

見つゝ來し春の浦わも惜しけれど

みそのの蘭の香にぞひかるゝ

けふよりは蘭てふ文字をわが名とし

この世のかぎり離れじと誓ふ

高き香の蘭の小花におほ宮の

みけししのびてとはに拜まむ

私はこの拜蘭の別號を、この世限りの我が名に止めず、冥途までも使用したいと思ひ、法縁俗縁淺からざる萬隆寺住職の來馬琢道師に戒名を頼んだところ、これ亦即諾、奎文院拜蘭成諦居士と附けられた。成諦は四諦のことで、私の本名四郎を意味するのである。これで私は來世まで、この光榮を持ちつゞけることが出来るとは、ゑんだが、家人は皆、そこまでは無用だと眉をひそめた。

私は拜蘭書屋を、蘭に縁あるものばかりで飾りたいと思ひ、先づ畫を—宮無極道人に依頼した。普通の畫家の作品では俗氣を脱せず、第一流の専門家の物は自分のやうな貧生の手には合はないから、素人の上手たる道人に所望したのである。道人快諾、表装まで附けて贈與されたが、畫は巨巖に據つた春蘭で、氣品清高、書屋備品の筆頭として決して恥かしくない。すなはち禮狀のはしに、

君がかきし蘭を飾れば部屋ぬちに

よき香たゞよふ心地するかな

と腰折を書いて贈り、來合せた友人に之を示すと、「春蘭には香氣が無い筈だ」といふ。「無い筈の香氣を發せしめるのが入神の筆の力だから、歌には斯うしておいても差支あるまい」と答へると、「君にも不似合な、石に漱ぐ類の強辯だ」といつて笑つた。

それからかなり日數を経た後である、福島晚晴翁から、長崎の日高鐵翁筆の蘭の小幅を贈られた。素人目にはそれ程有名な人の作とは思はれないが、刀の柄に手をかけた武士に對して、「我が首得べし、我が蘭得べからず」と豪語し、その要求を拒絶した老畫僧の氣骨が、細い葉の一本々々にも強い力を示してゐる。鐵翁は墨畫の蘭に於て、近世の第一人者であること、各種の畫人傳によつて知られてゐるから、これは書屋備品が追々豊になつ

ても、永く逸品たることを失ふまい。

私は拜蘭改號の由來を、その當時大谷大夫を御所に訪問して先づお話し申した處、大夫は米芾拜石の典據を特に興味深げに聽いた後、日光の田母澤御用邸内に三十勝の選があつて、その一つに拜石門といふのがあることを語り、尙それに關聯していろいろの話がされたのは嬉しかった。

拜蘭の撰名者杉山三郊先生は、その後約束の額面文字の外に、わざ／＼次の賀詩一首を作つて與へられた。

天風降國香。 光彩流茅席。

堪笑米南宮。 衣冠拜頑石。

先生の書がいゆる書家の書でなく、恰も蘭花が氣品の高い香氣を發散するにも似た書風であるのは、國香の文字とよく合致して、誠に一幅の藝術品であるが、轉結二句は少々米芾に氣の毒である。それで私は、

な笑ひそ石を拜みし人の國は

天つ御風もたふとからぬを

と禮狀の後に書き添へた。

三郊先生は、前記賀詩を與へらるゝ際、その關防の刻印を取り出し、石材に蘭の畫が彫りつけてあるのを示した後、更に刻んだ文字について説明された。「見らるゝ通り、この文字は百草皆帶香であるが、これは長崎の鐵翁といふ有名な蘭の畫の大家の用ひた關防に、蘭花一莖秀、百草皆帶香とあつたのを、蘭の好きな私は非常に面白く感じたので、蘭の畫を彫つたこの石材に、後の一句だけを刻んだのである。篆刻者は山本拜石といふ人で、是も脱俗の人である。拜蘭に贈る賀詩に此の刻印を押捺するのは、二重にも三重にも意味があるではないか」と。

私は、拜蘭撰號の際の如き喜びの聲をまたあげた。然も此の關防文字の

本元たる長崎の鐵翁は、私が前日晚晴翁から贈られた墨蘭の筆者ではないか。實に因縁と興味とが縦横に交錯して、拜蘭書屋の雅趣いよく深いといはねばならぬ。

昭和十四年六月二十五日、雨を侵して 皇太后陛下の御誕辰を奉祝するため権田原に向つた。高位高官の人の車が、間斷なく表御門を出入してゐる。單に御門外から拜をするだけの考で來たのではあるが、大夫にだけは知つておいて貰ひたいやうな俗氣がきざして、即詠の二首を鉛筆で名刺に認め、御通用門の警手に托して歸つた。

おほ宮のみ門の雀わがために

入りてけいせよけふのほき言

雨にぬれてをろがむ賤のあることを

くにのほこりと自らも思ふ

前の一首が、自分に参賀資格のないことを不平に感じてでもゐるやうに
解釋せられたのか、翌日大谷大夫から、自分に面會を求めたら即時入門が
叶ふのだつたにと、御鄭重なお手紙を戴いて恐縮した。

御切花の菊・ダリヤ・カーネーションの土に挿した芽は、十一月の小春
日和に根をおろして、いづれも元氣よく育ちさうに見えてゐたが、十二月
から一月二月の極寒時、責任者の源公がかなり熱心に世話したにか、はら
ず、菊とダリヤは遂に枯れてしまつた。

まごゝろの足らざりし我が怠りを

うらみ顔なる枯草あはれ

どこかの温室へ預つて貰へばよかつた。日當りの幾分かよい中野の自宅
なら、或は助けることが出来たかも知れなかつたになど、悔んで見ても、
徒らに死兒の齡を數ふるに過ぎない。

春になつて、たゞカーネーションだけが生き残つた。

我がいのち延ぶる思ひに待つものを

カーネーションの強く育たな

三人の愛兒の唯一人だけが育つた思ひで、朝出社すると先づ覗いて見る
カーネーションが、日當りの悪い場所を恨む様子もなく、十月の初めには
蕾を有つた。

よくぞ生きしよくぞ蕾をもちたると

細き莖葉を撫でたき思ひ

源公は之を鉢に移して、日向を逐ひつゝ、動かしてゐるが、光榮一周年の
記念日が追々接近するのに、堅いつぼみはなかく膨らまないのので、花の
店の永島君に又來て貰つて、十日から東洋園藝會社の温室へ預けた。

(昭和十四年十月二十日)

別號を拜蘭と改むる辭

（婦女新聞昭和十三年十一月第三日曜號掲載）

十月三十一日大宮御所で戴いた御菓子には、多年婦女新聞を援助せらるゝ特別關係者及び現に働いてゐる社員職工等數十名に福分けして、光榮を共にした。

御切花は、一週間人々と共に觀賞した後、菊、ダリヤ及びカーネーションの三種は葉や芽を土に挿して根をおろさせ、永久に光榮を生かすことにしたが、たゞ蘭花のみは、花の壽命かぎりで消えさせなければならぬ。これ一つが、此上ない憾みであるが、致し方もないので、一部は婦女新聞恩人の代表故穂積歌子刀自の靈前に供へ、餘はアルコール漬として形骸だけを留めることにした。

素より御花も御菓子も、全部丸野竹南畫伯を煩はして寫生し、社長室に掲げてゐるから、形状色彩は之によつて永久に想像することは出来るが、大部分の御花が根をおろし、明年また美しく咲くであらうのに、最も貴い御花の蘭のみが、今年限りで絶えてしまふのが、私には何よりも淋しい。

○

そこで思ひついたのは、私の別號を蘭の字のつく新成語に改め、今後筆とる毎に光榮を感謝したいといふ事であつた。つまり蘭と自分とを一つのものにしようとするのである。

私の今まで用ひてゐる別名は、和歌の場合だけは和田百邦といふ眞しやかな假面を被つてゐるが其他に於ては春浦といふ別號で通してゐる。この號は、私の第一の漢籍の師進藤銳軒先生―第二の漢籍の師は現に大宮御所へ萬葉集の進講にあがられる井上通泰翁の嚴父松岡約齋先生―に附けて貰つたもので、私の幼時の性格が浪だ、ぬ春の海のやうだとて、福島といふ苗字にも因んだ撰號だったのである。

五十年來用ひなれた春浦の別號を、今になつて廢棄するのは、多少残り惜しくも感ずるが、今度の大光榮を記念する爲と思へば問題でない。

私は斯う思ひ立つと、一刻も速く實現したくなり、直に杉山三郊翁を訪問して新號の撰定を乞うた。翁は、私が故あつて親交を辱くせる老儒で又名筆家でもある。勅撰の廣澤參議碑や、故澁澤子爵、下田歌子等の墓石文字は翁の揮毫である。翁は、夫人湘碧女史と共に、私の光榮を己が家門の光榮のやうに喜び、早速佩文韻府を持ち出して、蘭の字の成語を片端からしらべられた。

○

翁は、やがて莞爾として、佩蘭の二字を指して曰ふ。これは蘭の花を胸に佩びることであるが、蘭は幽谷の君子とも、王者の香ともいひ、滿洲國皇室の紋章にも用ひられてゐる。楚の屈原——離騷賦作者——は讒者の爲に斥けられて流浪してゐる時、蘭を胸に佩し、其香をかいで、君側に侍するやうな思ひをして自ら慰めた。この佩蘭の佩の字を拜に代へて、拜蘭と改號してはどうか。拜領の蘭と通俗に解してもよいが、蘭を拜する意味にとれば尙面白い。

杉山翁は斯ういつて、更に説明を續けられた。

古書に拜蘭といふ成語は無いが、拜石といふ故事があるから少しも差支ない。宋の有名な書家米芾は、非常に石が好きで終日石を愛玩し、其ため官職を怠つて譴責を蒙つた事もあるといふ。彼れ或る州の知事となつて赴任した時、役所の庭に立つてゐる石を見て、其形のいかにも怪奇にして趣致あるに感嘆し、遂に畏敬の念を生じて、「此石はおれをしてお辭儀させるだけの眞價を十分に具へてゐると言つて、急いで衣冠を取り寄せ、禮装して石の前に拜伏した。それ以來米芾は拜石丈人と呼ばれたといふことである。

我朝に於ては有名な菅公の詠に、恩賜御衣今在、此、捧持毎日拜三餘香、といふのがあるから、恩賜の蘭を記念する爲の別號として、拜蘭は好適でないか。

私は翁の説明の終るを待たず、思はず手を拍つて満足の意を表した。實際これ以上、今の私の心持にぴつたり合ふ成語はあらうと思はれない。然も其出典の面白くて深い味のあること、いかなる人がいかに苦心しても、こんな好適の文字は案出し得まい。私は又しても手を拍つて喜び、更に拜蘭書屋の額面揮毫を翁に乞うた。

日當りのよい翁の書齋には、老夫人丹青の蘭が三鉢並んでゐるが、いづれも一本づゝ引き出た莖に花を附けてゐる。側には蘭花譜と題する帙入の大冊が飾つてある。披いて見ると私の拜した蘭花に似た寫眞が多數集録され、蘭の秀と芳と清と高とが身に迫るやうに感じた。

雜誌界空前の光榮

—(婦女新聞昭和十三年十一月第四日曜號掲載)—

明治三十三年五月十日 皇太后陛下が、東宮妃として九條家より御入内あそばされた當日創刊した本紙が、一週一回の號をかさねて最近二千號に達したことを、陛下には御満足に思召され、大夫より戴かせよとの仰ありたる趣を以て、去三月十一日大谷皇太后宮大夫より、見事なる御切花並

に結構なる御菓子を、社長たる私が拜領したことは、當時本紙に記載した通りで、その際尙種々有難い思召をも拜承したのであるが、特に「御内々」の趣を附言せられたので、本紙上に於ても成るべく目立たぬやうに取扱ひ來つた處、其後承る所によれば、「御内々」とは「表立たぬ御扱ひ」といふ意味で、別に祕密と申すわけで無いさうであり、殊に御品に就いては、恐れ多くも一々お指圖あそばされたほど、有難い思召が籠つてゐる趣であるから、時期や、遅延した憾みはあるが、こゝに此文を書かせて戴くことにした。

従來、女子教育家又は社會事業家等に對して、賜品のあつた例は珍しくないが、文筆に従事するものに對して、今回私の拜した如き有難い思召の發現した例は全く初めてである。是は本紙の創刊日が陛下のおめでたい記念日であつたといふ特別の所縁に原因する特別の例ではあるが、しかし若しも本紙が、二千號二千週に亘る期間中、本來の使命たる三綱領の趣旨を忘れて、純然たる營利に終始してゐたなら、今度の如き光榮には浴し得なんだ事明らかである。その點からいふと、今回私の戴いた有難い御沙汰は、單なる創刊日の所縁といふだけでなく、文筆報國を念とする全新聞雜誌に對する御獎勵の意味も含まれてゐるものと拜察するのが至當であらう。

果して然らば、今回の私の光榮は、私一人が平氣で拜受し奉るべきものでなく、幾多の同業者諸

君と共に、吾々の使命に對して御獎勵を賜はつたものとして感激しなければならぬ。私は潜越ながら大小幾千種の雜誌、老壯幾萬人の雜誌記者の代表として、斯界に前例のない光榮に浴したものと考へる。尙又、たとひ前記の通りであるとしても、本紙がもし、婦人の向上女子教育の振興を念とせず、娛樂本位に編輯する讀物であつたなら、是亦今回の如き光榮に浴し得なんだこと明らかである。此點に於て私は、私の戴いた御花や御菓子には、過去の婦女新聞と主義思想を同じうする婦人團體又は其社會運動に對する御獎勵の意味も、含まれてゐるものと拜察することは、敢て不當でないと思ふ。

果してさうとすれば、婦人團體関係者も亦、私の拜した光榮の一半を、御自分達の光榮として感激なさらなければならぬ。たゞ私は、婦女新聞をおめでたい記念日に創刊したといふだけの所縁に依つて、諸氏の代表に選ばれたに過ぎないと信ずる。

素より私個人としては、感激筆紙に盡しがたいものがあり、有難い思召に答へ奉る覺悟は既に固めてゐる。此春以來休んでゐる社説を來週より又執筆する如きも其一端であるが、全雜誌関係者、全婦人團體関係者も、此際何等かの反省又は覺悟がなければならぬと確信する。

(拜蘭福島四郎)

婦女新聞二千號の辭

(昭和十三年十月第二日曜號掲載)

明治三十三年五月十日、恐れ多くも東宮殿下(後の大正天皇)御成婚記念と標榜して、第一號を創刊した婦女新聞は、本日こゝに二千號を刊行するに至つた。

週刊新聞の二千號は二千週の集積である。二千週、之を日數に換算すれば一萬四千日、年數にすれば三十八年と六ヶ月、此間に、北清事變あり、日露戦争あり、明治天皇、大正天皇の崩御あり、世界大戰あり、關東大震災あり、滿洲事變あり、二・二六事件あり、而して現に支那事變の爲に皇軍の威力は四百餘州を震撼してゐる。思へば長い二千週であつた。

今日我國の新聞雜誌中、二千週三十八年餘の生命を持續してゐるものは極めて少い。その中でも創刊者が健康で、同一週刊新聞を二千週以上繼續してゐるのは、本紙以外に絶無なのではなからうか。明治三十三年五月創刊の第一號に、「發行の趣旨」を執筆した二十七歳の青年が、今は六十五

歳の白髯翁となつて「二千號の辭」を草すること、實に感慨無量である。

本紙が幸にして茲に至つたに就いては、いろ／＼の方面に感謝しなければならない人々が澤山あるが、最も感激に堪へないのは、皇太后宮職(初めは東宮職・中頃は皇后宮職)および東伏見宮家から、過去三十八年間御買上の光榮を賜はつてゐることである。この光榮が、本紙をしていかに發奮せしめ、又いかに自重せしめたか、他に比較すべき何物もない。

此光榮を思ふと同時に、筆者が聊か自ら安んずるは、大正の初期から十年前後にかけて、社會主義思想が燎原の火の如く我國に燃えひろがつた時にも、本紙が敢然としてわが國體の擁護に微力を致したことである。實際あの頃は、編輯局の男女記者も、社外寄書家の大部分も、社會主義にかぶれないものはなく、わが國體を讚美するやうな筆者の論文は、蔭で若い記者の嘲笑材料となつてゐること明瞭であつた。その中にあつて、鬼も角信念を一貫し、昭和に入つて、國體明徴の世論が勢を得、遂に今日の如き皇威八紘に輝く盛世に會することを得た筆者は、さながら敵の重圍を脱して味方の陣營に歸つたやうな喜びに顫へる。此一事、いさゝか以て自ら慰むに足ると信じてゐる。

407
150

唯こゝに遺憾なことは、支那事變が意外に擴大して、終期を豫測し得ず、平和の化身たるべき女性が、銃後に於て戦争の手傳をなさねばならない事である。是は本紙三綱領の一たる「男女の協力による愛と平和の社會を實現せん事を理想とす」といふ信條を一時中止するもので、不本意千萬であるが、相手が屈せざる以上、こちらから頭を下げて和を請ふわけに行かず、今は一切の事に目を瞑つて戦争の目的を達成し、速に非常時を常時に復せしむる外ない。社會國家が常時に復せない限り、女性も平和の化身たる常態に復することが出来ない。

どうか漢口の陥落が蔣介石の運命の終局となり、日支兩國婦人が共に手を携へて、東亞の平和を建設する爲に努力する日の速に來らんことを祈つてやまぬ。

之を二千號の辭とする。(福島四郎)

昭和十四年十月卅一日印刷 非賣品
同年十一月十日發行

著者 福島四郎
東京市淀橋區角管二ノ九三

發行兼印刷人 石川大助
東京市淀橋區角管二ノ九三

印刷所 婦女新聞社印刷部
東京市淀橋區角管二ノ九三
電話四谷一七三六番

終

